

日本建築学会 建築計画委員会

# 住宅地計画 小委員会 @横浜

コーディネート：田中友章・小浦久子

2008年11月29日（土）

## 住宅地計画小委員会@横浜の旅程と資料リスト

2008年11月29日(土)

参加者：横山・江川・島崎(江川研大学院生)・小浦・杉山・田上・徳尾野・三谷・田中・野澤・山本・寺川

コーディネート：田中(午前)・小浦(午後)

### ■横浜市営地下鉄ブルーライン「下飯田駅」 午前10時20分集合

↓(徒歩)

### ■『さくらガーデン(農地つきコーポラティブ住宅)』

\*藤岡泰寛先生(横浜国立大学)および居住者による解説と見学

資料：

- ・「アエラ」2004年11月15日号、pp40-48
- ・「宅地とまちづくり」、(社)日本宅地開発協会、No.186、pp28-33、2001年3月
- ・藤岡泰寛他：菜園付きコーポラティブ住宅における共同性の特徴に関する研究 さくらガーデンを事例として、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2、pp37-38、2006年
- ・藤岡泰寛他：菜園付きコーポラティブ住宅における共同性の特徴に関する研究 その2 春夏期の菜園活動と居住者コミュニティ、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2、pp261-262、2008年

↓(タクシー)

### ■『横浜市営三ツ境ハイツ』(設計：山本理顕設計工場)

資料：「新建築」2001年1月号

↓(相鉄「三ツ境駅」～京急「黄金町駅」)

### ■『黄金町バザール』(<http://www.koganecho.net>)

\*鈴木伸治先生(横浜市立大学)による解説と見学

資料：

- ・各種パンフレット
- ・「黄金町バザール・ガイドブック+読本」、編集 黄金町バザールオフィス+鈴木伸治・横浜市立大学国際総合科学部鈴木ゼミ、発行 黄金町バザール実行委員会 2008、2008年9月11日

↓(タクシー)

### ■『寿町 ドヤをホステルに&寿町のまちづくり』(<http://yokohama.hostelvillage.com>)

\*岡部友彦氏(YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE プロデューサー)による解説と見学

↓(徒歩)

### ■横浜中華街散策後(案内：鈴木先生)、懇親会『麻婆豆腐辣』にて

幼い頃、童謡「赤い靴」を涙して聴いていたヨコヤマはヨコハマに独特の空気を感じ、つい憧憬の目で見てしまいます。ヨコハマコンプレックスのヨコヤマの見学記なので、相当のバイアスがかかることをお許しいただいて、話を進めます。

#### ① さくらガーデン：「テーマ・コーポラティブ」

フリープランやオープンタイプの可変型住宅計画（非コーポラティブ）、あるいは自由設計だけを売りにするデベロッパー企画の（疑似？）コーポラティブ等の台頭、さらにはマンションリフォームの進展などにより、コーポラティブ方式のメインストリームのひとつであった「個別の自由設計」が効力を失いつつある。自由設計が消費され尽くした感のあるコーポラティブ方式にとって、もう一つのメインストリームである計画プロセスを居住者間で共有することによる「関係性のデザイン」「コミュニティの熟度」だけで勝負できるかといえば、共同性に対する今日的居住者の価値観や負担感から考えても限界があろう。と、コーポラティブのこれからを些か悲観的に見ていた矢先に出会ったのが、「菜園好きは寄っといで」という趣味や嗜好を共有する「さくらガーデン」である。それは、共同性を過度に主張せず（前提とせず）に、趣味やライフスタイルの共有が、コーポラティブ方式を成り立たせる「契機」、さらには、居住者間を緩やかに繋ぐ「媒介」となるといった、所謂「テーマ・コーポラティブ」といえるものである。コーポラティブ方式そのものへの理解や共感から特定の趣味・嗜好・生活スタイルの共動へとコーポラティブの推進力を転換することに、閉塞感が見えてきたコーポラティブ方式の新たな方向性・可能性、および今日性が窺われる。近年、広がりつつあるシルバーコープやエコビレッジ等もテーマ型的一种といえよう。さらに、テーマの設定は、趣味、職業（漫画家集住のトキワ荘のような）、生活（料理好きなど）・場所（リノベーションに住む）等で、無限に考えられる。且つ、生活がいかにも楽しそうである。熊本出身の居住者の我々に対する干し柿の大サービスや長靴に作業着姿でご案内下さった藤岡先生の姿は、その証左のように思える。

菜園に対する力の入れ方に比して住戸・住棟計画のあまりのさりげなさが気にならないでもないが、個別設計を前面に押し出し、変化のあるファサードを描出している従来型に対して、寧ろハードの計画よりも菜園というソフトの仕掛けを重視した結果のようにも思える。但し、もう少し半戸外空間や納屋風に使えるスペース、キッチンを充実するなど菜園を手掛かりにした新たな住戸・住棟計画ができるように思った。

#### ② 三ツ境

3分間見学で余り印象がないものの気になったこと。従前の変形、分散した敷地をそのまま活用し、周囲の住宅地との馴染みをつくり出そうとしていることには共感もてる。反面、周辺との一体化や連続性を意図するときの、住戸・住棟計画のコンセプト・デザイン・スタンスの固さや強さが気になった。比較的密集した市街地域に対して、10戸のまとまりをシステム

ティックに配列した強い計画性が引き起こす断絶感、即ちスケールを抑えた程度では周辺とは一体化しないことを感じた。

### ③黄金町バザール

いきなり別世界に飛込んだような異質な空気が感じられた。悪所としてにぎわった歴史性、レンガタイル風の仕上げ・狭小間口・赤いキャノピー看板等、一見してそれとわかる記号的な場の痕跡などをキャンバスとする「インスタレーション」のようなアートが描出され、さらに YOKOHAMA という地域性が重層化することによって、白いキャンバスに自由に表現する通常のアートやアートビレッジでは得られない独自性を生み出しているように思えた。他のどこよりも「じんじん」が似合うまちである。地域コンテキストをタブラ・ラサ（白紙還元）に転換するアートではなく、それを活かしながら「ずらす」ようなアートによるまちづくりが展開されている。まちづくりや空きスペース活用において、「困った時のアート頼み」の手法（水都おおさかがその典型）が一過性のイベントや尻すぼみの結末となりがちなのに対して、黄金町はアートと商売（例えば一生ショップ）と生活が集積し連続することによって、日常性と持続性が実現され、テーマ・パークならぬテーマ型まちづくりの興味深い事例と思われる。と評価しつつも些か無責任な他所者の目から見れば、（実際に昔の様子を体験している訳ではないが）悪所のドロドロとした欲望や生きることの凄まじさや強烈さといったバイタルなエルドラドは、アートというある種のヘルシーワールドへと転換されてしまい、少し残念な気もする。都市を生彩あるものにする多様性の一部「暗がり」や「毀れ」が削ぎ落とされ、明るく楽しく健康的なまちは退屈かもしれない。

### ④寿町

ドヤの空室を旅行者用の廉価な宿泊の場に用途転換するといったドヤのヤド化を企図した発想勝ちの計画である。これも既存文脈のずらしにより建物をいじらない新手のコンバージョンと言え、企画者側から見れば建物利用を効率化する巧妙なビジネスモデルとして成立している。しかしながら、ドヤの住人にとってヤド化の意味は奈辺にあるのか不明である。寧ろ、ヤド化がドヤの住人にとって有意性をもたらすような構図が仕組まれるような相互性が見たいものである。コンバージョンがドヤという最小限かつ典型的な都市居住とのコンフュージョンへと展開することが期待される。

## 住宅地計画小委員会「横浜」

2008.12.10 三谷幸司

私の知らない世界を沢山見せていただき勉強になりました。横浜市営住宅三ツ境ハイツを除くと、まさに横山先生好みの「隙」・「毀れ」・「緩み」そして「手垢」に満ちたプロジェクトの見学会であったように思います。田中先生、小浦先生ありがとうございました。

1、「好み」はずれのプロジェクト「三ツ境ハイツ」を一見して、こんな贅沢な市営住宅を造っていいのかというのが正直な感想でした。このプロジェクトの見せ場である、住棟端部の透けるテラス部分を取り除くと、2階建でかつ現況のわずか2/3程度のボリュームにしかならないプロジェクトになってしまいます。

そうした感情を抜きにすれば、興味深い空間提案です。「ユニットの集合」から、さらにブレイクダウンして「部屋単位の集合」とする組み立て方、その結果「6文銭タイプ」の住棟の不細工な厚みを感じさせず、見事にスレンダーな形にまとめた手腕は、なかなかのものと思いました。

2、農地つきコーポラティブ住宅「さくらガーデン」は気に入りました。

①本当に畑作りが好きな仲間が集まって住むことで生まれる住民同士の付き合いの深さは集住する上で大変貴重です。「農地付きとする」企画の意味に感心しました。

②畑は基本的に手作りですから、周辺を囲む住棟も骨格だけしっかりしておけば、住まい手のセルフエイドで「手垢」にまみれた住空間を各自で自由に育てることができます。まさに手づくり畑のテストにぴったりな住空間づくりだと思いました。

②元気な関東圏では、畑付きの居住は都市近郊における住まい方の一選択肢であり、「攻めの市場物件」であると思います。縮小を始めた関西圏の郊外住宅地の中には、空地・空き家に囲まれた住宅地も出始めています。空地を農地化した畑付き住宅地として再生する「後退型の市場物件」の登場も間もないのではないかと思います。

3、ドヤ街にも人口減少と高齢化が押し寄せていることを知りました。なんで横浜の一等地に今でもドヤ街が残っているのだろうかという疑問に、見事に答えてもらいました。

①あの3畳の個室規模と賃料が、政府の生活保護に見合う価格であること

②ドヤの床単価が横浜ランドマークタワーのそれと同等程度であること

③それゆえにNPOが、空き家化するドヤをホステルとして再生することも可能なこと  
ドヤ街の土地利用も市場原理の中で回っているのですね。

4、最後に黄金町バザール。

悪の浄化作戦で衰退した黄金町を、アートの町として再生しようとする、皆さんの心意気に感心しました。企画側も一過性のイベントとならないように経済的継続性に気くばりしていることもわかりました。市が補助するアーティストショップに対して、残りのショップをいかに定着させていくかが勝負なのではないでしょうか。黄金町が復活するほど、不動産価値も上昇しますので、その自立のタイミングが重要に思います。

以上

名称: さくらガーデン

概要

農地付コーポラティブ住宅

●横浜市泉区 ●戸数: 8戸(定期借地権付分譲4戸、賃貸4戸) ●敷地面積: 1090㎡ ●竣工: 2002年

コメント

この30～40年の間に、都市近郊の農地は様々な事情で維持保全が困難となり、その多くはアパート経営に転用されてきた。このようなアパート経営が定型化し、これを専門とする大手事業者も育ってきた。しかし、これまでの農地転用による賃貸アパートは資産運用、節税対策を第一義とし、環境保全やコミュニティに対する配慮は希薄だった。その無秩序な集積が自然環境を蚕食しているケースは随所にみられる。また、賃貸アパートが良好なストックとならないなかで、空き家が多発するというケースもみられ、かならずしもアパート経営が安定した資産運用手段とみなされなくなっている。

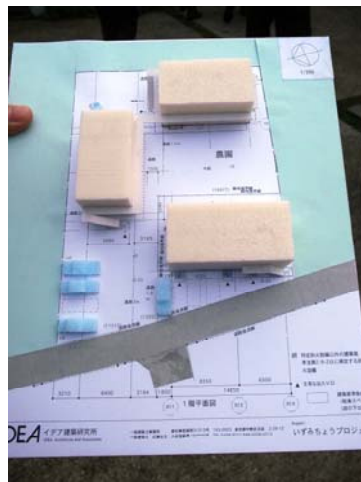
さくらガーデンは、このような背景のもとに計画された、農地付コーポラティブ住宅の先駆的事例である。農地付コーポラティブ住宅は、土地所有者の資産運用に農地の維持保全という意義を加えた事業方式である。さらに、農作業をコミュニティ形成の契機にしようという意図が込められている。

計画内容を見ると、1000㎡余りの敷地に約300㎡の農地を囲むかたちで、2階建て鉄筋コンクリート造3棟がコの字型に配置されている。さらに、計画地に隣接した農地の借用も可能とされている。定期借地権付分譲4戸、賃貸4戸という構成は、土地所有者の資産保全と、農地付というところから定住性が求められることの摺り合わせの結果である。住戸は当初、各戸接地のメゾネットの計画であったが、間取りの自由度を高めるためにフラットに変更された。住棟のデザインはシンプルで、コーポラティブ住宅らしさともくに見当たらないが、広縁をもつ1階住戸の開放的なところが特徴的である。

農地は各戸に区分されて利用されており、とくに農作業が共同化されているわけではないが、任意の助け合いや相互に作物を分け合うといったかたちで、農地を通しての近所づきあいがみられる。同好の士が集まった結果だから当然といえるところもあるが、コミュニティ形成という点では成功しているように見受けられる。居住者のリーダー的存在はリタイアした60歳代の人だが、若い居住者もいる。

現在、第2番目の計画用地も用意されているとのことだが、計画着手にはいたっていない。様々な条件が整わないと実現が難しいことをうかがわせる。

写真・図面等



名称: 三ツ境ハイツ

概要 設計 建築:山本理顕設計工場/構造:構造計画プラスワン/設備:団設備設計事務所  
敷地面積 12,625.52m<sup>2</sup>/建築面積 4,704.70m<sup>2</sup>(37.26%<50%)/延床面積 7,600.78m<sup>2</sup>(60.20%<100%)  
/階数 地上2階および3階/工事期間 1999年4月~2000年3月

大学院の私の授業(建築環境デザイン特論)では、さまざまな集住空間を扱うが、この三ツ境ハイツも、よく学生が発表題材に選ぶ作品である。私も、ぜひ現地を見たいと思っていたので、今回の視察対象に加えていただいた。高齢者を意識した公営住宅ということだが、竣工直後の写真では、冷たい感じがして、あまり良い印象を持ってはいなかった。しかし、実際に訪れてみると、結構良い。何と言っても、低層である。建物の奥行きが薄い。奥行きが薄いので妹島タイプの隙間テラスが効いている。そして、最大の要因は、地形と配置である。いや、敷地のとり方、すなわち、公営住宅の街との関係性が良いのである。日本では、敷地の中の配置計画さえもおろそかであるが、何よりも敷地の選び方、設定に計画的意図が見られないことが多い。ここでの勝利があるとすれば、敷地の選択であり、その敷地や地形との応答である。地形をいじらず、道路をいじらずに、建築を織り込んでいったのが良い。いくつかのタイプで構成されているが、そのタイプが繰り返しに見えないボリューム、配置なのが良い。いつも言っている「スケール」「ボリューム」「マス」(近代の空間システム・日本の空間システム、日本建築学会特別研究、2008.10 p107-)に関して良く出来ている。

もうひとつは、階段である。いつも思うのだが、良くできた階段は、そこに人の姿がなくても、人気(ひとけ)を感じる。人気を感じることでできる階段は、風景を生かされる景観にするように思う。ここでは、2階のテラスへと誘う階段にそれが見える。ただし、僕的に言えば、あまりにもモダンデザインで、もう少し何とかならないのかと・・・ではあるが。

あとは、沿道型と妻型(幅、奥行きが薄く、妹島タイプの隙間テラスが道路側に繰り返す)による配置構成である。意図的かどうかはわからないが、場所を作り出す構成になっていることである。傾斜地の地形につきあうことと、この配置構成により、なんとか適度な親街路性と親空性(住環境ビジョンの再構築、2007年度日本建築学会大会PD資料、都市計画委員会、2007.8 p20-他)が実現できている。あとは、建蔽率37%、容積率60%という、住宅市街地では類を見ない低密度の、このような構成の公営住宅の空間に、どれだけ地域資源としての公共性が織り込まれているかが重要で、周辺を含む環境性の向上の意味が、どのように社会化されていくのかが今後問われるのだろう。

「民間の木造住宅群の中に埋め込まれるような計画である。だから、できるだけ低層に押さえたいと思った。それと、開発申請をしなくて計画を進めたいということもあって、従来までの道路の位置の変更、宅地の形状の変更は一切しない。それまでの道路、宅地がそのまま残るわけである。でも、それもこうした住宅地では重要なことだと思った。できるだけ過去の記憶を残すように計画したい。既存の道路に囲まれた宅地形状の影響もあって、多くは10世帯を単位にするような、囲み型の計画になった。10世帯で一つの庭を共有する。共有された庭にはワゴン車が一台入れるほどのスペースが用意されている。将来、住民に対する介護や看護が必要になった時に、そのためのサービス車がここに寄り付くことができるように考えたからである。あるいは、民間のデリバリーサービス車もこの車寄せを利用する。单身もしくは二人住まいの高齢者の多くが接地階に住むことを想定しているのだから、この中庭に設けられた車寄せはかなり有効に働くと思う。」(山本理顕)



氏名 江川直樹 (関西大学/現代計画研究所)

名称:横浜市営住宅 三ツ境ハイツ

概要

- ・所在 神奈川県横浜市瀬谷区三ツ境
- ・設計 山本理顕設計事務所
- ・階数 地上2階および3階
- ・市営住宅の建て替え
- ・敷地面積 12625.52 m<sup>2</sup>
- ・建築面積 4704.70 m<sup>2</sup>
- ・延床面積 7600.78 m<sup>2</sup>
- ・第一種低層住宅専用地域

コメント

三ツ境ハイツは、老朽化した木造平屋市営住宅の建て替えで、敷地は横浜市が民間に払い下げた土地が入り込んでいて、さらにかなり傾斜のある場所である。元からあった宅地の形状や道路を残したまま計画がされている。

竣工当時の写真が載る雑誌を見る限りでは、スケールやボリュームに配慮がされているものの均質で単調なものが並んでいるため、結局は大きな固まりとして見えてしまうのだろうといった印象であった。

しかし、実際に行ってみると、傾斜や敷地条件が功を称して、単調なプランの連続がかなりぼかされ、思っていたほど大きな固まりに見えなかった。

また、玄関周りの外部空間の存在も単調さをぼかす大きな要因となっていた。

外から見える場所に私的に使える空間を作ること、その空間を住人が思い思いの使い方をしていること、変化を与えていた。また、視界が抜けてボリュームを小さくすることにも貢献していた。

中庭の建物を繋ぐブリッジは、庭のスカスカした感じが無くなり周辺の建物群との疎密のギャップを埋めている印象を受けたが、10世帯の共有部分としてコミュニティを繋ぐ役割は果たしていないだろう。また、その中庭は外部の人が自由に入ることが出来るとしているが、フェンスでほぼ閉じられていたり道路の舗装方法が周辺とは違ったりしているため、境界線は強く感じた。窓の全面型ガラスからもプライバシーが重視されていることが伺える。

それぞれ各部分に周辺への配慮は見られたが、それでもなお周辺との連続を感じないのは、均質な素材、色のせいだろう。

写真・図面等



氏名 島崎稔矢(関西大学江川研院生)



名称: 黄金町バザール

**概要** :かつて麻薬や売春街などのイメージを持たれていた初黄・日ノ出町地区では、2000年以降安全・安心のまちづくりが展開されている。2008年現在、ネガティブなイメージを創り上げていた建物や高架橋下を活用したスタジオ等を拠点に、多様な人々の関係を紡ぎながらまちの再生を促す期間限定アートイベントとして「黄金町バザール」が開催されている。当日は、横浜市立大学の鈴木伸治先生に案内して戴いた。まちあるきと共に、拠点で昼食を交えながら地区の成り立ちから本事業に至る背景についてレクチャーを受けた。

**コメント**

- ・昼過ぎに現地に到着。まずは黄金町駅を降りてすぐにある川沿いのイベント会場に向かった。
- ・いつの間にか入場していた会場では、まず小さな駄履風のプレファブ店舗で「呼び込み」にあった。
- ・どうやらこれから若手劇団による舞台がはじまるらしい。ここが昔の売春宿であったと聞き、「呼び込み」という体が場所と妙にマッチしているように感じた。
- ・少し歩くと、歩道に咲いたバラソルのなかに見慣れた風貌の人物を発見。『焼立器飲茶美味窯付移動車』で有名な「じんじん」氏である。実は私の関わる釜ヶ崎でもお世話になったこともあり、このアートイベントへの親近感が増した。
- ・この「黄金町バザール」は、京浜急行黄金町駅から日ノ出町界隈をエリアに2008年9月11日(木)～11月30日(日)の期間限定イベントとして、バザール実行委員会が主催、横浜市開港150周年・創造都市事業本部が共催する事業として実施されている。(市からの資金支援有り。横浜トリエンナーレとも連携)
- ・京浜急行電鉄の高架橋に新設した黄金スタジオ・日之出スタジオや店舗を改修した初音スタジオの3つのスタジオを拠点に地域の空店舗を再利用したギャラリーや飲食店などが点在している。
- ・平成17年に、地域住民と警察、行政の3者が連携して売買春行為を排除する「バイバイ作戦」を敢行してようやくこのようなイベントにたどり着いたとのこと。深刻な課題を共有できる状況下で、地域住民が昔のような「普通のまち」を目指して一体になったことが原動力ともいわれる。
- ・一方で、その後に出来た約150もの空店舗の問題や地域住民の高齢化や担い手の問題をかかえるなかでまちのイメージを変え、まちの可能性を追求するために、「アート」をテーマに新たな商業や人材などが交流する「場」作りのためのキックオフイベントとして企画された。
- ・(同様の問題を抱えている釜ヶ崎と比較して) 地元・警察・行政がなかなか協働できない(信頼できていない)状況を振り返りながら、このまちで可能になった契機やキーパーソンや可能性についてもう少し深くヒアリングしたいと思った。
- ・いずれにしても、これほど困難な状況の中で実現にまで至ったということについて、地域住民の方々のご苦勞を考えると並大抵の事ではなかったであろうと感服するとともに、行政や警察の役割や、専門家の役割の重要性を再認識することが出来た。
- ・帰路、「普通のまち」という表現について思いを巡らせていた。というのは、釜ヶ崎で、いわゆる「自治会」を主体とする組織において、図らずも同様のキーワードがあげられていたからである。一方で「特殊性・特徴のあるまち」の可能性や「負のイメージをプラスに活かす」方法などについて積極的に追求しようという意見も強い。特に釜ヶ崎は、(マジョリティである)労働者のまちとして位置づけられている中で、いわゆる「コミュニティ」概念を再構築する必要がでてきている。
- ・今回のイベントは、ある意味で仮設的な非日常の場を、継続的な(日常の)まちづくりに昇華させようというものなのかもしれないが、「住民」と「よそ者」の間における主体と協働の有り様が試されているのではないかと感じた。特に「アート」には、そのパフォーマンスに現れていないとしても、その「場」の持つ空気や歴史のなかで成立しているものも多いと思う。
- ・もし場所性が遺伝子のように継承されるとすれば、隠すのではなく、活用することが効果的であり、「普通」ではないことがまちの魅力になるのかもしれない。
- ・最後に、大阪でも漸くこれまで関わることのなかった各地元主体がつながりつつある今、この地の経験を住民間でシェア出来ればと思った。

**写真・図面等**

① ② ③ ④ ⑤



- ① 『焼立器飲茶美味窯付移動車』  
パフォーマンス: じんじん
- ②③ 黄金スタジオ (高架下新設)  
中には6つの店舗とイベントホール、外からは額縁のように切り取られて内部の様子が伺える。
- ④ kogane-X LAB.  
空店舗を活用したイベントショップ
- ⑤ 以前は売春宿であった建物を改修した鉄板焼屋、この2階で昼食をいただきながら鈴木先生よりレクチャーを受けた。

名称: 横浜 寿町 どや街/ヨコハマホステルビレッジ

#### 概要

高齢化する日雇い労働者が集まる寿町で、そうした層の居住地確保と空き家対応としてのホステルの挿入を、ビジネスとして展開している事例。

#### コメント

ヨコハマホステルビレッジ プロデューサーの岡部友彦氏(コトラボ合同会社)に経緯の説明とご案内をいただいた。

以下、感想や疑問点をいくつか。

- ・案内していただいた物件は、いずれもきれいに改装されていて、勝手に抱いていた「どや」のイメージとはかなり異なる。
- ・スペースと設備は最小限であり、付加的な台所、シャワーなどは共用である。宿泊のあり方、さらには住まい方についても考えさせられる。
- ・日雇い労働者の居住スペースとホステルのスペースをフロアで分け、管理も別になっている。
- ・地区として閉ざされているわけではないにも関わらず、適度な領域性があり、内に入ってしまうと、まちとしてそれなりに快適なのではないかと感じる。
- ・小規模なホステルが点在していて、それをまとめて管理・運営していることで、全体の秩序が維持できている。
- ・新たにこうしたビジネスに参入しようとする人(団体?組織?)が出てきた時にどう対応するのか?
- ・老朽化した建物で更新できないものをどうしていくのか?
  
- ・現状は、日雇い労働者が多数で、バックパッカーなどのホステル利用者は少数派である。将来的に、これが逆転するようなことになったときに、このまちはどうなるのであろうか?あるいは、少数派となった日雇い労働者は、引き続きここで生活できるのであろうか?といった危惧を少し抱く。

ちょうどこの見学会の数日前に、この地区内で NPO 法人さなぎ達が運営する「さなぎ食堂」のことがテレビで紹介されていた。コンビニの期限切れ間近のお弁当を無料で回収し、それをアレンジして定食にし、安価で提供するという仕組みである。

なお、この事例については、日経アーキテクチュア 2008-12-22 号の p.119 に紹介されている。

#### 写真・図面等

写真撮影は遠慮しなければならぬ状況だったので、野澤が撮影した写真はない。  
ネット上のホステル・ビレッジの HP より写真を転載します。



横浜ホステル・ビレッジのHPは、<http://yokohama.hostelvillage.com/ja/>。